

2021 (令和3年) 4/ 8 木曜日

毎日小学生新聞編集部  
郵便 千100-8051 (住所不要)  
ファクス 03-3212-2591 電話03-3212-0321  
メール maishou@mainichi.co.jp

# 毎日小学生新聞

MAINICHI

発行所 毎日新聞東京本社  
〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

配達お問い合わせ  
購読お申し込み

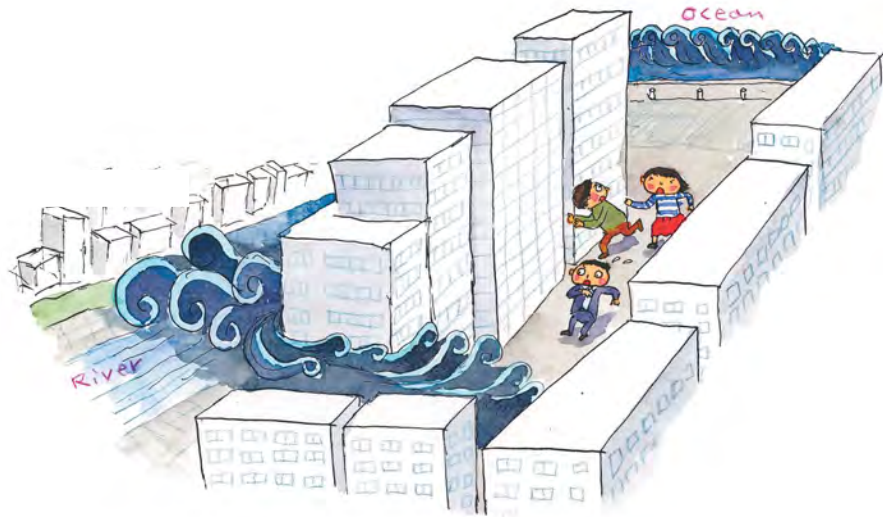
0120-468-012

(6-21時、一部地域は平日10-18時)

定価 1か月1750円 (本体1620円、消費税130円)・1部70円



## 津波は海以外からも



イラスト・にしむらかえ

東日本大震災 10周年  
「あの日」に学ぶ

理科 <上>

東日本大震災から身近な防災を考える「あの日」に学ぶの第7回は「理科」<上>「地球と生きる私たち」です。災害は自然現象が社会の弱い部分

と結びついた時、大きな被害をもたらします。津波の流れ方などを学びながら、地球と仲良く暮らす防災を考えます。  
【百武信幸】

いさかのぼり、途中の弱い部分であふれて被害が広がりました。河口から約4キロの場所にあった宮城県石巻市立大川小学校では、津波が逆流し、学校のすぐそばにある橋であふれ、児童・教職員84人をふくむ多くの住

東日本大震災では、科学技術が進んだ現代だからこそ気を付けるべき二つの特徴的な津波がありました。一つは川をさかのぼる「河川津波」です。長さ249キロの北上川を河口から約50

「天災は忘れたころにやってくる」。今から100年前の時代を生きた物理学者の寺田寅彦(1878~1935年)が語ったと伝えられる言葉です。その寺田はこんな警告を残しました。文明が発達し、堤防や高い建物といった天然に反抗する人間の細工によって自然を征服したつもりでいると、自然が突然「檻を破った猛獣の大量のよう

に「暴れ出し、むしろ「細工」によって災害はより大きくなる」。津波に詳しい東北大学災害科学国際研究所の今村文彦所長は、身の回りの地形を知って「複数の避難場所を用意すること」や「車での避難を避けること」をすすめます。そして「知識を学び、地震の後は沿岸や川に近づかず、いち早く避難する」といった「判断と行動」に結びつけることが命を守る「1」呼びかけています。

もう一つは「都市型津波」の被害です。海や川からあふれた津波が街中に入ると、ビルや家の間を抜け道を探すように流れ、合流して勢いを増し、避難する人にとって思いもよらぬ場所からおそってきます。宮城県多賀城市では、海や川からあふれた波が道路に流れ込み、人も車も流されて大きな被害になりました。

何のタネ? スタンフラー

タネがトゲトゲなのは東洋種、丸いのは西洋種

民が犠牲となりました。行動が命を守る

津波に詳しい東北大学災害科学国際研究所の今村文彦所長は、身の回りの地形を知って「複数の避難場所を用意すること」や「車での避難を避けること」をすすめます。そして「知識を学び、地震の後は沿岸や川に近づかず、いち早く避難する」といった「判断と行動」に結びつけることが命を守る「1」呼びかけています。

もう一つは「都市型津波」の被害です。海や川からあふれた津波が街中に入ると、ビルや家の間を抜け道を探すように流れ、合流して勢いを増し、避難する人にとって思いもよらぬ場所からおそってきます。宮城県多賀城市では、海や川からあふれた波が道路に流れ込み、人も車も流されて大きな被害になりました。

津波に詳しい東北大学災害科学国際研究所の今村文彦所長は、身の回りの地形を知って「複数の避難場所を用意すること」や「車での避難を避けること」をすすめます。そして「知識を学び、地震の後は沿岸や川に近づかず、いち早く避難する」といった「判断と行動」に結びつけることが命を守る「1」呼びかけています。



# 大木聖子・慶応大学准教授

◇プロフィール 1978年生まれ、東京都出身。北海道大学理学部地球惑星科学科を卒業し、東京大学大学院地球惑星科学専攻で博士号(理学)を取得。東大地震研究所助教などをへて、2013年4月から現職。専門は地震学、防災教育。著書に「地球の声に耳をすませて」(くもん出版)など。

# ちっぽけな自分知って



地球の視点でみると、地震は「地球のくしゃみ」ほどのことで、自然現象の一つ。人間にじわじわするつもりでもなく、地球は地球なりに生きています。でも私たちの社会に弱い部分があれば、大きな災害になるので、つしよに生きていく方法を考えるしかありません。幼いころ、アリを手にのせて歩いていると、母からアリは手の上の上のっていることに気づいているかな」と聞いて

かけられ、自分を上から見るような初めての感覚を覚えました。アリは右に進んでも、私が真つす、進んでいることに気づいていない。にぎりしめれば死んでしまうこともわからない。地球と私の関係も同じで、自分は小さな存在なのだと思いました。ただ、アリと違つのは、人間は自分たちがのる地球について知ることができるということ。次の行動を予測できなくても、現象を知ることができます。

もともと生き物が好きで、中学生の時、母にすすめてもらった、地震学者・島村英紀さんの本「教室ではおしえない地球のはなし」を読み「地球も生き物なんだ」ともっと知りたくなりました。高校生の時に起きた阪神大震災をきっかけに、「同じことが繰り返されないように」と地震学者を志しましたが、その後の災害で「ただ地球(地震)を知るだけでは人の命は救えない」と思いました。10年前に震災が起きた時、勤務していた東京大学地震研究所で津波の映像をみて、強い責任を感じました。人々は毎年、震災命日の3月

11日は発生時刻の午後2時46分に黙とうをしますが、その時亡くなった人はほとんどいなくて、多くはその後の津波で亡くなっている。地震はいつ起こるか予知できないけれど、何が起るか理解し、次に取るべき行動に移れば、命を守ることができる。そんな思いから、今は防災教育に力を入れています。地震後に情報を得るのは大変だから、身一つでわかるように、ゆれの長さやマグニチュード(M)の目安を伝えていきます。教室で立ってられない地震ならば震度6以上で、ゆれが10秒ほどならM7.1分ならM8、3分ならM9です。絶対ではないことを学者がいうのは勇気がいることですが、専門的な正しさよりも命を守る方が大切です。

みなさん、地球と自分の2人きりで考えてみて下さい。地球と自分の大きさを思い描けば、いかに自分がちっぽけか気づくはず。地球は君のことを全然考えてくれないけれど、自然の恵みをいつもくれる。地球とつしよに生きていくことが分かるはずですよ。